

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第173号

イザヤ 65:1

平成22年2月26日

第一段落 主は大なる方。大いにほめたたえられるべき方。その聖なる山、われらの神の都において。高嶺の麗しさは、全地の喜び。北の端なるシオンは大王の都。神は、その宮殿で、ご自分をやぐらとして示された。

第二段落 見よ。王たちは相つどい、ともどもにそこを通り過ぎた。彼らは、見るとたちまち驚き、おじ惑って、急いで逃げた。その場で恐怖が彼らを捕らえた。産婦のような苦痛。あなたは東風でタルシシュの船を打ち砕かれる。

八節 私たち、聞いたとおりを、そのまま見た。万軍の主の都、われらの神の都で。神は都を、とこしえに堅く建てられる。 セラ

第三段落 神よ。私たちは、あなたの宮の中で、あなたの恵みを思い巡らしました。神よ。あなたの誉れはあなたの御名と同じく、地の果てにまで及んでいます。あなたのさばきがあるために、シオンの山が喜び、ユダの娘が楽しむようにしてください。

第四段落 シオンを巡り、その回りを歩け。そのやぐらを数えよ。その城壁に心を留めよ。その宮殿を巡り歩け。後の時代に語り伝えるために。この方こそまさしく神。世々限りなくわれらの神であられる。神は私たちをとこしえに導かれる。 詩篇48篇

この「シオンの歌」は人々がカナンの地の北の端で歌っている設定で、コラの子たちによって歌われた賛歌ですが、織り込まれた創意工夫は見事です。詩篇第二巻の冒頭の七篇の「メシヤの詩篇」は、天啓法的区分に従って解釈すると、終末の末期の大艱難期からメシヤの王国にかけて起こることが描写されているとみなされている箇所です。42-44篇は大艱難期、45篇は小羊の婚宴、46-48篇はメシヤの王国をそれぞれ、メシヤの王国到来、メシヤの支配領域、支配の中心地に焦点を当てて描いたもので、このシリーズの最後の48篇は神が敵の手から守られた都シオンが、全世界、東西南北の中心地、過去、現在、未来を見渡す中心地として描かれている驚くべき詩篇です。メシヤ到来で危機からの完全な解放を喜び歌う46篇と救いをもたらされた主の主権を喜び祝う47篇には、48篇に共通してヘブル語の「大なる」という用語が用いられて、互いに関連づけられています。要約すると、これら三つの詩篇は「大なる助け手なる神は、大いに崇められるべき方で、大いに賛美されるにふさわしい」となるのです。メシヤの完全な勝利を祝うにふさわしい意図的な構成には驚かされますが、48篇の四つの段落に織り込まれた独創的な「折り句」の論理にはそれ以上に驚かされます。

第一段落の1-3節で焦点が当てられている方位は、「ツァフォン」(NIV、ヘブル語聖書訳:「北」の意、冒頭に引用した邦訳ではそのまま「北」と訳されている)に象徴される「北」で、第二段落4-7節は、「東風」に象徴される「東」、第三段落では「右の手」に象徴される「南」、第四段落では「後の時代」に象徴される「西」で、時計回りに方角が移動しています。8節は、この詩篇の中心で、シオンの都が万軍の主の都として、とこしえに確立することが語られています。すなわち、シオンこと、エルサレムは全世界の中心、霊的にも地理的にも東西南北の中心となります。古代イスラエルでは太陽の昇る東に向かって立ち、方角と左右、前後を関連づけたことから、右手が南、後が西、左手が北となりますが、その関係がこの詩篇の各段落に反映されているのです。42篇で始まるコラの子たちの詩篇は、エルサレムよりはるか北の端のヘルモンの地から彼らがかつて、神を求めて聖所に向かう「巡礼の旅」へと、同胞を喜びと感謝で導いたことを思い起こすところから始まっていますが、この詩篇でも詠み手は北から一巡して、中心シオンで長い巡礼の旅を終えています。実際、イザヤ、ミカはじめイスラエルの預言者たちは異口同音に、メシヤの時代には「多くの民が来て言う。『さあ、主の山、ヤコブの神の家の上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちがその小道を歩もう。』それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ」と、回りの山々よりも隆起して、霊的にも高められたエルサレムに向かって、全地から諸国民がメシヤの教えを聞こうと、巡礼にやってくる様子を描いています。

「ツァフォン」はイスラエルのガド族に割り当てられたヨルダン川東岸の地で、そこに異教神バアルが住んでいるという伝説の町でした。士師記によく登場する町で、ギリシャ人にとってオリンパスの山が、ゼウスの岩であったように、フェニキヤ人にとってツァフォンは彼らの神々の主神である「エル」の聖なる住まいでした。異邦人たちは最北端を神々の山とみなし、地と天を上り下りする道は北の端にあり、御使いたちが地に下る場所をヘルモン山とみなしていました。預言者イザヤは「あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになる

う。』とサタンが、北の山を自分のものにする事で、自分が神として御使いを支配し、全地を治めようと図ったこと、その結果、神の怒りが下り、天界から投げ出されたことを記しています。この世にとっては魅力的なツァフォンですが、この詩篇の詠み手は、主の例祭のための巡礼の旅が北の端、シリアの国境から始まり、聖地ツァフォンはおろか、北イスラエル王国の創始者ヤロブアムによってダンに設置された異端的な祭壇も尻目に、多くの神の民が続々と真の礼拝の場、エルサレムに向かう様子を思い描いているようです。シオンは神ご自身がご自分の民に会われると決められた場所で、出エジプト後ご自分の民と会われる場所として神が定められたあの南端のシナイ山ももはや巡礼者たちの焦点ではないのです。このことを知っている詠み手は、メシヤが到来された今、シオンこそすべての中心であることを、「北の端なるシオンは大王の都」と呼び、最北端の山、ツァフォンをも「シオン」とみなすことによって、メシヤの支配が全地に及んだことを預言的に宣言したのでした。

第二段落では、「東風」に託して織り込まれている方位の「東」に向かって、すなわち前方に目を向けます。この段落に描かれているのはすでに起こったこと、過去をしかと見ることによって、メシヤなる王が何をされたかの確認です。長距離輸送のために作られた地中海で古代最高の船「タルジシュの船」の破壊に象徴されているのは、大自然にも命じて敵を打ち砕かれる王の威力です。ここで興味深いのは、過去とは「前」に起こったこと、すなわち、私たちの前方にあるものを見ることができるよう、すでに明らかになった過去は前に象徴されるという論理です。同様に、後ろにあるものを私たちは見ることができないので、未来は後ろに象徴されることになるのです。前に向かうことが未来、後ろが過去という固定観念に縛られてしまうと、一見逆であるかのような論理によって、この詩篇の構成は見事になされています。第三段落で、詠み手は、北から「南」へと目と思いを巡らし、「右手」に象徴される神の力、義が、今、全地の中心シオンに満ちているのを感じています。第四段落では、北、東、南から西に向かうことになりませんが、西には後ろ、すなわち、未来が象徴されています。「後の時代」に思いを馳せた詠み手は、シオンの強さが、やぐら、城壁、宮殿という外的なものではなく、この真の神の御臨在によるものであることを世代から世代へと語り継いでいくことを宣言して、このメシヤの王国を描いた詩篇は終わっています。

48篇の真ん中の8節が霊的にも地形的にも全世界の中心であることを考察しましたが、非常に興味深いことに、この詩篇には、イスラエルにとって、全聖書の中でも中心に位置づけられる画期的な出来事が反映されていたのです。キリスト教会で用いられている旧新約聖書では、詩篇は最初の創世記から数えて十九番目、最後のヨハネの黙示録から数えて四十八番目に位置しますが、これら両方の数字19と48とを結びつけた1948年は、イスラエルが国連で承認され、千九百年ぶりに国家として復興した記念すべき年でした。詩篇に、1900年代の世界史、特にイスラエル史が預言されていることを発見したJ・R・チャーチは、まさに42篇から48篇にかけてコラの子たちが描写した出来事は1942年から1945年にかけての第二次世界大戦において成就した預言であったとみなしました。モーセ五書第二番目の出エジプト記に匹敵する詩篇第二巻の最初の42篇が、エルサレムから遠く離れた北の地で捕囚の身にある神の民の苦しみを描いていることから始まっているように、1942年、ユダヤ人たちはナチスの体制下でひどく迫害され、1945年に終戦を迎え解放されるまで、生き地獄を体験し、六百万人以上の生命が奪われたのです。まさに1948年には「出エジプト」に匹敵する「出ヨーロッパ」の出来事を通して、イスラエル国家が誕生したのです。同様に、これらの詩篇を終末論的未來預言として解釈するなら、大艱難期を経てメシヤの王国到来ということになり、全世界からの迫害をユダヤ人はまたしても経験することになるのです。

48篇の第一段落の「高嶺の麗しさ」と邦訳されている用語は、十一世紀のラビ、ラッシイによれば、「木の枝」の意のヘブル語からの派生で、多くの小枝を芽吹かせる大きな枝、木の幹の意があるそうですが、もしそうであれば、この木は切り倒され、全地に四散された「イスラエルの家」にたとえられることになります。西暦七十年、ローマ勢によって破壊されたエルサレムが、今日、私たちの世代に再び、芽吹き、美しいシオンとして復興することがこの用語には反映されていたのです。切り倒され、再生する木といえば、キリストが預言されたいちじくの芽吹きのたとえと使徒パウロが語ったオリーブの根と接ぎ木のたとえが思い出されます。またラッシイによれば、この言葉は、「花嫁」を意味するギリシャ語の「ニンフ(ヌフエ)」から派生しており、「美しい花嫁」の意にもなります。神と夫婦の関係で語られるイスラエルが、艱難を経て、神の家エルサレム、神との正しい関係に戻されることが預言されていることになります。また第二段落の「産婦のような苦痛」は、キリストがオリーブ山で弟子たちに語られた終末預言の中で、キリストの名を名乗る多くの惑わす者が現れ、戦争、戦争のうわさ、飢饉、地震によって世の中が揺り動かされるようになることを語られた後、「しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです」と言われたことに関連づけることができるようです。このような悲しみが起こらなければ、イスラエル国家は誕生しないこと、すなわち、メシヤの時代は来ないことをキリストは教えられたのでした。イザヤは「だが、このようなことを聞き、だが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で生み出されようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ」とシオンの誕生が神のご介入による奇蹟であること、神の「とき」が一瞬のうちに訪れることを預言しています。